

令和四年度 一般選抜（後期日程）

小論文

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は、表紙を含めて7ページあります。また解答用紙2枚と下書き用紙2枚が配付されています。
試験中に問題冊子や解答用紙、下書き用紙の印刷不鮮明、ページの落丁、乱丁および解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 3 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入してください。
(1) 受験番号欄
(2) 氏名欄
- 4 受験番号、氏名が正しく記入されていない場合は、採点できないことがあります。
- 5 設問の字数には句読点が含まれます。
- 6 試験終了後、問題冊子、下書き用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

アメリカで起きていること

治療費請求七〇〇万円

誰しも「病気になる」ということはできれば避けたい。しかし、避けたくても避けられないのが人間の運命である。軽い病気ならばひと安心だが、重い病気となると、一気にさまざまなことが心配になる。病気が自分や家族、自分を必要としている周囲の人に大きな影響を及ぼすからだ。もしこれに加えて、治療に莫大な費用が必要になり、それを一家の家計がすべて負担しなければならなくなったら、「病気になる」ことの心配はますます大きくなり、恐怖になってくる。それを突きつめていくと、病気にはかかれないうことになる。できるだけ病気の苦痛も少なく、元気に生き、そして突然生を終えるのがよい。忽然として病なくして終わるのであれば、当然、病気のために必要な医療費もごく少なくてすむ。

しかし、残念ながら、それぞれに与えられている運命は誰にも予測することができない。病気は生来健康であってもそうでなくても、また富んでいても貧しくても、逃れることはできない。病気が重ければ大変な治療費がかかる。だから、病気になってどれくらいの費用がかかるかを心配することになる。

Aわが国では医療保険制度が行きわたっているので、医療費の支払いで一家が破産するという最悪の事態は考えにくい。しかし、外国ではあらかじめ備えがなければ、その心配は現実のものとなる可能性もあるのだ。

私の知人のお嬢さんが仕事で米国に滞在していて交通事故にあった。手術が必要となり、しばらくの間ICU(集中治療室)で治療を受けた。徐々に回復し、大きな後遺症が出ることもなく、彼女は日本の両親のもとに無事帰ってくる事ができた。ところが、その後で米国からとんでもないものが追いかけてきたのである。総額約七〇万ドル。日本円で七〇〇万円以上に上る治療費の請求書だ。いくらわが子のためとはいえ、この額をポンと支払える家庭はそう多くはないだろう。

米国では病院に入院して治療を受けた場合、もし保険会社が医療費を支払ってくれなければ、自宅を含めて持っている財産すべてを手放し、一家離散の憂き目を見なければならぬことがある。それは本当のことだったのだと思った。私の知人の場合は、幸運なことに結局、保険会社がほぼ全額を支払ってくれることになったらしい。

「シッコ」の描く現実

二〇〇七年に、マイケル・ムーア監督の「シッコ」という変わった名前の映画が封切られた。ムーア監督は、米国の高校(コロラド州コロンバイン高校)で起きた銃の乱射事件を

描いたドキュメンタリー映画「ボウリング・フォー・コロンバイン」などの作品で社会派としてよく知られている。「シッコ」は、米国医療制度の驚くべき実態をやや揶揄誇張した映像で描写した作品だ。米国では、ドキュメンタリー映画史上第二位の動員を得るほどの反響で、同時期に公開された「ダイ・ハード4・0」を上回ったらしい。この映画の公開を契機に、米国の高額な医療費、そしてそれを難なく支払えるごく一部の富裕層とそうでない人たちとの間の、**B**大きく拡大した医療格差の問題が広く世界に知られることになった。

映し出される映像は強烈だ。電気ノコギリで指を二本切断してしまった男性が、医療費の価格を聞いて考え込む。二本とも接合手術をしてもらうほど、財布に余裕がないからだ。手術の費用は中指が六万ドルで、薬指が一万二〇〇〇ドル。そして、とうとう薬指一本だけの手術であきらめたと語る姿。

医療破産のために家財道具を車に積み込んで、娘夫婦の家の物置に引っ越す両親。この夫婦は夫が心臓発作で三度倒れ、それに加えて妻ががんになったために、自宅を手放すことになった。もともとごく普通の生活を送り、医療保険にも入ってはいしたが、保険からは出ない自己負担の医療費が積もり積もったためだ。涙ながらに、「これが我々のアメリカなのか」と訴えていた妻の姿が印象的だった。

定年を迎えて楽に暮らせると思っていたら、メデイケア（高齢者の医療保険）ではカバーされない薬の代金のために、トイレ掃除の仕事をする事になった七九歳の男性。交通事故で意識を失っても、事前に許可を得なければ救急車は呼べないと保険会社に言われて支払いを拒否され、途方に暮れる女性。事故で意識がないのに、どうやって許可が取れるのかと、後で悔やんでももう遅い。

何かと理由をつけては支払いを否認し、時には一方的に契約を破棄する保険会社。やせすぎでも、太りすぎでも保険の加入を拒否される。試みにムーア監督が、インターネット上で「医療保険の会社とのトラブルの経験がありますか」という質問への意見を募集したら、たちまちのうちに二万六〇〇〇人からの報告が寄せられた。保険会社の元社員からも、会社の利益のために、患者の希望をなるべく断る仕事をしていたことが報告される。また、脳腫瘍があるのに脳のMRI検査を認めないなど、保険の支払いを却下する率が高いほど保険会社の社員としては評価が高くなる実態について、社員が告白する姿も映し出されていた。

かなりの誇張があるとはいえ、これでは困り果てる人たちが大勢生まれるに違いない。問題は、これが米国で国民の六人に一人といわれる無保険者だけに起きているわけではないことだ。米国では保険に加入していても、その保険からの医療費の支払いが不十分なことが多い。ムーア監督は、「これは医療保険に加入している二億五〇〇〇万人の米国人の問題なんだ」と言っている。つまり、米国で医療を受ける際には、よほどの大金持ちであるか、レベルの高い医療保険の加入者でなければ、誰にでも起こりうる問題だということだ。

米国の医療の驚くべき実態については、堤未果の『ルポ 貧困大国アメリカ』でくわし

く描写されている。「一度の病気で貧困層に転落する人々」のありさまは、日本でもかなり知られるようになってきた。同書によれば、キューバから亡命してきた一家の一歳の子は、医療保険がないために医者にかかれず死んでしまったという。そのとき、母親はそれまで決して口にしなかったことを言った。「もしもこれがキューバだったら、あの子は助かったわね。」キューバは革命後に国民が医療と教育を無料で受けられる制度をつくりあげている。世界で最も豊かなはずの米国で、キューバよりも劣悪な医療しか受けることができないのはいったいどうしてなのだろうか。

同様のルポルターージュに、ジョナサン・コーンの『ルポ アメリカの医療破綻』がある。こちらのルポにも、心筋梗塞の急患を断る救急病院、ごく普通の市民に起きる「医療破産」、利益だけを追い求める悪徳医療保険会社などと、「シッコ」で紹介されたものと似た事例が取り上げられている。「シッコ」で映像化されたことは、ごくごく例外的で極端な事例であるとは言えないようだ。

苦い薬

二〇一〇年、ニューズウィーク誌(八月一六日号)には、日本の医療が、質、アクセス(医療のかかりやすさ)——ここでは保険がカバーする範囲)、コストのすべての面で世界のトップに近い評価を受けているのに対比して、米国の医療はその対極にあり、過大な出費のわりには一部の国民しかカバーできていないと報じた。二〇一三年のタイム誌(三月四日号)には、「苦い薬」と題する大きな特集記事が掲載された。そこでは、堅実に暮らしてきた中流家庭の米国人でも、しばしば治療をあきらめなければならぬほど医療費が高くなっている実例が紹介されている。米国のごく普通の人々にとって、米国の医療制度はかなりの苦痛を伴うものになっていることは、ほぼ間違いない。

一方で米国には古くから寄付の文化があり、富裕層の中には病院に多額の寄付をする人も少なくない。がんの治療で世界的に知られるスローン・ケタリング記念がんセンターやMDアンダーソンがんセンターなどは、寄付でできたがんセンターとして有名だ。米国の病院の中には、富裕層からの寄付によって貧困層の医療費を補填するよう配慮する病院もあり、大きな助けとなってきた。

しっかりした会社に職があり、良質の医療保険に加入している米国人にとっては、米国の医療は質が高く親切で気持ちのよいものと受け取られているに違いない。実際、富裕層やあるレベル以上の医療保険に加わっている人たちにとって、米国の医療はすばらしく、世界一だと誇るだけの理由はある。

米国には皆保険制度がないといっても、高齢者に対するメディケア、貧困層に対するメディケイドのように、低い公定料金で医療が提供されている。また、医療保険の状況も州によって違いがある。メリーランド州は[※]診療報酬の決定を市場だけに任せず、公的機関が報酬額を決定する制度を維持しつづけた。その結果、同州では、全米でもめずらしく医療費抑制に成功しつづけてきている。しかし、米国全体でいえば、他の先進諸国の倍近い

医療費を使いながら、医療の格差は大きく拡大し、医療を受けたくても受けられない人々を大勢生み出しているのだ。

医療はサービス

一九八四年に公開された映画「瀬戸内少年野球団」は、敗戦の重苦しさから野球をとおして明るさを取り戻していく淡路島の少年たちを描いている。映画は敗戦の詔勅がラジオから流れる重苦しいムードの中で始まる。しかし、そこで突如、明るさといえはこの上ないグレン・ミラー楽団の演奏する「イン・ザ・ムード」で、映画の雰囲気が一変する。この場面を観たときに私は、この明るさと快活さが戦後の米国がもっていた特質だったことを強く感じた。そして、この明るさの基盤に、平等で公平な社会というものの存在があったのではないかと思つた。

米国に対しては、戦後の占領下でのさまざまな軋轢あつれきがあつたものの、一方で公平でフェアな国、努力すれば必ず報いられる社会を実現している国という強い印象があつた。しかし、今の米国は、戦後の明るくてのびやかな米国のままなのだろうか。すさまじい活力をもつた国ではあるものの、二〇〇〇年を過ぎたころに、もはや別の国になってしまったのではないか、という気さえする。

一九八〇年頃、私は米国のワシントン郊外に留学していたことがある。その近くにニードウッド湖という小さな湖があつて、釣りやボートを楽しむことができた。ワシントン郊外は真冬には気温がマイナス二〇度よりも低くなることが多く、湖面は凍結し、スケートもできる。ただ、よほどしつかりした結氷でなければ、湖でスケートするのはとても危険だ。もし日本ならば「冬季立ち入り禁止」とか「危険につきスケート禁止」などの警告が出ているはずである。しかし、ニードウッド湖では、「スケートは自己責任(Skating at your own risk)」という、あまり目立たない看板が湖畔に立っているだけだった。米国の個人の責任の負い方、逆にいえば、責任をもつならばかなりのことが許される考え方に、強い印象を受けたことを記憶している。

米国では、医療は患者が必要に応じて自分の判断と責任で購入するサービスの一種とみなされている。日本のように政府が医療費を決めるといふ制度はない。病院は治療費や薬の価格を自由に決めることができる。また、日本のように国民全員が何らかの医療保険に加入するという制度もない。その結果、米国では医療費がどんどん高くなって、病気になる人も医療費を支払えなくなり破産する人が増えつづけている。今では国民の六人に一人は医療保険の保険料を負担できない無保険者となっている。また保険に加入し、保険会社にきちんと保険料を支払っていても安心できないのは、さきに述べたとおりだ。

米国の保険会社は医療費支払いの上限を定めている。日本の高額療養費制度のように、ある限度を越える医療費については健康保険が負担するのはまったく逆である。ある限度を越えた高額な医療費については、保険会社は面倒を見ない。したがって、個人がどれだけ負担することになるのかは見当もつかない。それまで地道に暮らしていた中堅サラリ

ーマンが、何かの具合で失業して医療保険を失い、そこでがんにかかったような場合には、本当に破産の恐怖が待ち受けている。実際、米国において個人破産の理由で最も多いのは、医療費の支払いだ。

このような問題を少しでも改善するために、オバマ大統領は国民すべてが医療保険に加入することを義務付け、保険がないために医療を受けられない問題を解決しようとした。この結果、二〇一〇年に「オバマケア」と呼ばれる医療保険制度改革法がやつのこととで成立した。しかし、米国の保守派はそれに対して、国民が自由に保険制度を選択する自由（その自由には保険に入らないという自由もある）を制限するものとして反対し、訴訟を起こした。結局、この訴訟は最高裁まで行って、僅差でオバマケアは合憲という判決が下されることになる。

それにしても、**C**日本の制度と米国の制度との隔たりには驚かされる。オバマケアが皆保険を目指すものと聞いて、米国には皆保険制度がないのかとびっくりする。またある限度を越える支払いについては、誰も助けてくれないという制度にますます驚く人も多いだろう。

（注）記載されている肩書等は掲載当時のもの。

※ 診療報酬・医療機関に医療行為（診察、治療、処方など）の対価として支払われる費用のこと。

（桐野高明、『医療の選択』、岩波書店、二〇一四年から抜粋、一部改変）

問1 傍線部Aわが国では医療保険制度が行きわたっているについて、具体的にどのような制度でしょうか。文中の表現を用いて30字以内で書きなさい。

問2 傍線部B大きく拡大した医療格差の問題について、具体的にどのような問題でしょうか。文中の表現を用いて150字以内で書きなさい。

問3 傍線部C日本の制度と米国の制度との隔たりには驚かされるについて、著者は具体的にどのような隔たりに驚かされているでしょうか。文中の表現を用いて250字以内で書きなさい。

問4 米国の大きく拡大した医療格差の問題を解決するためには、どうすればよいと思いますか。文中のキューバと日本の事例を参考に、400字以内で自分の考えを述べなさい。

採点のポイント

問1

指定された文字数で、国民皆保険制度について文中の表現で示されているかを採点しています。

問2

具体的な問題を、以下の要素①と②について本文から読み取り、指定された文字数で適切にまとめることができているかを採点しています。

- ① 保険加入者であっても、医療保険の会社からの医療費の支払が十分でなく、トラブルになることが多い
- ② よほどの大金持ちであるか、レベルの高い医療保険の加入者でなければ、医療費を支払えないということが誰にでも起こりうる

問3

具体的な隔たりを、以下の要素①②③について本文から読み取り、指定された文字数で適切にまとめることができているかを採点しています。

- ① 米国では、医療は患者が自分の責任で購入するサービスの一種とみなされている
- ② 米国の保険会社は医療費支払いの上限を定めている
- ③ 日本の高額療養費制度のように、ある限度を越える医療費については健康保険が負担するのはまったく逆である

問4

設問の命題について、指定された文字数で自分の考えを適切に述べることができているかを、次の要素から採点しています。

- ① 米国の大きく拡大した医療格差の問題
- ② キューバの医療制度の事例
- ③ 日本の医療制度の事例
- ④ 自分の解決策
- ⑤ 文章力（妥当性、文字数、語彙など）